慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アニメ聖地が聖地であり続けること：尾道・城端の例から
Sub Title	
Author	由谷, 裕哉(Yoshitani, Hiroya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.142- 143
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大会報告要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アニメ聖地が聖地であり続けること：尾道・城端の例から

由谷　裕哉

本報告は、アニメ聖地巡礼という社会現象において“聖地”がどのように意味づけられているのか、コンテンツ放映後数年から10年を経過しながら現在も“聖地”と認識され続けていると考えられる、広島県尾道市（とくに御袖天満宮）と富山県南砺市城端を事例として考察した。

まず、ここでの“聖地”とは、特定のアニメ（日本産のアニメーション作品）のファンが、作品に関連して“聖地”と意味づけられている場所を“巡礼”と称して訪れる対象であるとした（以下、引用符を略する）。2006年放映の『涼宮ハルヒの憂鬱』（第1期）、2007年放映の『らき☆すた』、2009年の『けいおん！』（第1期）などの集客力や地元の活性化に注目して、主に観光学の研究者がゼロ年代後半頃からアニメ聖地巡礼の研究を始めた。

それに対して報告者は、いくつかの点（苦行性、回遊性、記念行為、聖地で祈願する場合があることなど）からアニメ聖地巡礼は日本に伝統的な巡礼を継承しており、Ｊ・クリフォードのいう“生成する伝統”ではないか、と主張してきた（由谷裕哉＆佐藤喜久一郎『サブカルチャー聖地巡礼』岩田書院、2014年、参照）。

本報告では、これまでの報告者の論考で必ずしも充分に議論できなかった聖地の意味づけについて、上記の2箇所について各々が聖地であり続けることへの問いかけも含めて考究した。

まず尾道については、同市そのものが多くの小説、映画、ＴＶドラマ、漫画、アニメの舞台背景となっていることを確認したうえで、御袖天満宮を聖地とする『かみちゅ！』（2005年）における取り上げられ方を見た。同社が大林宣彦の映画『転校生』（1982）のロケ地であることに加え、『かみちゅ！』では大林映画のその他のロケ地をも意図的に踏襲し、さらに時代設定も尾道3部作の1983年頃とされているものの、同社を訪れるファンのほとんどがオリジナルとなる大林映画を知らないことにも触れた。さらに、同社に奉納されている絵馬によれば、同社は描かれないものの尾道が舞台背景となった『たまゆら』第2期（2013）の影響で訪れた巡礼者が多いと考えられること、尾道の坂と狭い道により、古寺巡りが回遊性を有すること、などを指摘した。

城端については、当地を舞台背景とした主要なコンテンツは『true tears』（2008）であったが、同作を制作したP.A.WORKS社の別作品『恋旅』（2013）や『SHIROBAKO』(2014-15)でも、街の風景もしくは建物の一部が描かれていることを確認した。同町が特異なのは、P.A.WORKSの本社が城端にあり、『true tears』を見たことがない同社アニメのファンも、当地を訪れることである。さらに、当地は浄土真宗大谷派別院である善徳寺の門前町であり、『true tears』にも山門や境内が少しだけ描かれていた。さらに、柳宗悦が同寺で主著『美の法門』を執筆したため、城端は“民芸の聖地”とも呼ばれている。また、『true tears』で描かれた曳山は国の重要

民俗文化財であり、5月の曳山祭に聖地巡礼するファンも少なくない。

もっとも、城端には曳山の祭場である神明宮を含めてファンが絵馬を奉納する宗教施設がないため、本報告ではJR城端駅に置かれたファンの為のノートへの記帳に注目した。その言説からは、ファンが『true tears』で描かれた祭礼のモデルとなった5月の曳山祭や9月のむぎや祭だけでなく、善徳寺の虫干し法会など様々な機会に城端を訪れて聖地巡りをしていることが確認できる。

以上により、アニメ聖地巡礼の先行研究が注目した『ハルヒ』『らき☆すた』『けいおん！』において、学校・民家・マンション・店舗・駅のような普通の場所がアニメの舞台背景として描かれたことにより、ファンが参集するに至ったことで観光学者に注目されたが、これをアニメ聖地として一般化することは疑問であることが導かれた。尾道も城端もかねてから寺社参詣の目的地であり、御袖天満宮および善徳寺は、それぞれ尾道・城端を表象する宗教施設である。それらの場所へのアニメ聖地巡礼は、伝統的な寺社参詣パターンを基底にしていると考えられる。

さらに、これらのアニメ聖地に、元のコンテンツ放映後に時間が経過してもファンが訪れるのは、新たに関連する作品が登場したことなどによると考えられるが、尾道の御袖天満宮と『たまゆら』第2期、城端の色々な場所（善徳寺・神明宮・じょうはな座、ほか）と同町に立地するP.A.WORKSとは、必ずしも相互に関係がない。このことは、ファンがオンラインを含む様々な情報から自分なりの聖地像を再帰的に作り上げ、ある場所を自分にとっての特別な地、すなわち聖地と意味づけたうえで巡礼するのではないか、と結論づけた。

（よしたに　ひろや　小松短期大学教授）